

太宰治作

走れメロス

朗読
菅野和子



太宰治（ださい おさむ）

1909年（明治42）・1948年（昭和23）青森県生まれ。東京大学仏文科中退。津軽屈指の大地主の六男として生まれたことが、太宰の生涯と芸術に決定的な影響を与えた。中学時代から文学に親しみ旧制弘前高校に入ってから左翼思想に接し、大地主の子であることに屈託した罪意識を抱くようになった。東大に進んでからは井伏鱒二に師事したが、心中事件や非合法活動への関与等が重なり、彼の心に終生消えぬ「黒点」を残した。それでも井伏等の協力により作家としての道を歩み始め、35

年、「逆行」が第一回芥川賞候補となる。前衛的な方法を駆使した作品と共に、平明な「富獄百景」「女生徒」や翻案的な「右大臣物語」「お伽草子」などの佳作を数多く生み出した。「走れメロス」戦前、戦中の太宰の充実していた時の作品である。戦後は便乗思想を批判する一方、「ヴィヨンの妻」など既成倫理に反逆する短編を発表し、坂口安吾、織田作之助、石川淳などと共に「無頼派」と称せられ、滅び行く高貴なものへの挽歌を描いた「斜陽」で一大流行作家となる。

「走れメロス」は昭和15年の作で、雑誌「新潮」に発表されたが、文末に「古伝説とシルレルの詩から」とある。ギリシャ・ローマ時代の作品の翻案と思われる。内容は「メロスは暴君ディオニスの暗殺を決意するが、捕らえられて処刑されることになる。メロスは妹の結婚式に出るために、親友を人質にしておいていく。帰途、度重なる不運に出遭い、一度は戻ることをあきらめるが、再び走り出す」というもの。平凡な牧夫だが正義と熱血の徒・メロスの勇氣と友情、そして一時は親友を裏切ろうとした、「人間の心の魔」を見事に描いている。本シリーズ第6巻所収の、鈴木三重吉作「デimonとピシアス」も、同じギリシャ・ローマの古典に材を取っていて、似たような場面が一部重なるが、三重吉の作は大正9年の発表で、「独裁者の孤独と苦悩」に力点がおかれている。

「用語解説」

邪智（じやち）

よこしまな知恵

磔刑（たっけい）

はりつけの刑

渡し守（わたしもり）

渡し舟の船頭

刑吏（けいり）

死刑の執行にあたる役人

歔歔（きよき）

すすり泣き、むせび泣き

メロスは激怒した。必ず、かの邪智じやちぼうぎやく暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であつた。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此このシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律気な一牧人を、近々、花婿はなむことして迎える事になつていた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買いに、はるばる市にやって来たのだ。先ず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩

いた。メロスには竹馬の友があつた。セリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかつたのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思った。ひっそりしている。なんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になつて来た。路で逢つた若い衆をつかまえて、何かあつたのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであつた筈だが、と質問した。若い衆は、首を振つて答えなかつた。しばらく歩いて老人に逢い、こんどはもつと、語勢を強くして質問した。老人は、あたりをはばかりる低声で、わずか答えた。

「王様は、人を殺します」

「なぜ殺すのだ」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持っては居りませぬ」

「たくさんの人を殺したのか」

「はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣よつぎを。

それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。」

「おどろいた。国王は乱心か」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手

な暮しをしている者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。きようは、六人殺されました」

聞いて、メロスは激怒した。「呆れた王だ。生かして置けぬ」

メロスは、単純な男であった。買い物、背負ったまま、のそのそ王城にはいつて行った。たちまち彼は、巡邏じゅんらの警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなってしまった。メロスは、王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであったか。言え！」暴君ディオニス
は静かに、けれども威厳を以て問いつめた。その王の顔は蒼白そうはくで、
眉間みけんの皺しわは、刻み込まれたように深かった。

「市を暴君の手から救うのだ」とメロスは悪びれずに答えた。

「おまえがか？」王は、憫笑びんしょうした。「仕方はんぱくの無いやつじゃ。おまえには、わしの孤独がわからぬ」

「言うな！」とメロスは、いきり立って反駁はんぱくした。「人の心を疑うのは、最も恥すべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑って居られる」

「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾つぶやのかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落着いて眩つぶやき、ほつと溜息ためいきをついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが」

「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か」こんどはメロスが嘲笑した。「罪の無い人を殺して、何が平和だ」

「だまれ、下賤げせんの者」王は、さつと顔を挙げて報いた。「口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、いまに、はりつけ磔はりつけになつてから、泣いて詫わびたつて聞かぬぞ」

「ああ、王は伶俐りこうだ。自惚うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞いなど決してしない。ただ、――」と言いかけて、メロスは足もとに視線を落とし瞬時ためらい、「ただ、私に情をかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えて下さい。たつた一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰つて来ます」

「ばかな」と暴君は、しわが噎しわがれた声で低く笑つた。「とんでもない嘘うそを

言うわい。逃がした小鳥が帰って来るといふのか」

「そうです。帰って来るのです」メロスは必死で言い張った。「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰って来なかったら、あの友人を絞め殺して下さい。たのむ、そうして下さい」

それを聞いて王は、残虐な気持で、そつと北叟ほくそえ笑んだ。生意気なことを言うわい。どうせ帰って来ないにきまつている。この嘘つきにだま騙された振りして、放してやるのも面白い。そうして身代りの男

を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直者とかいう奴輩やつばらにうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰って来い。おくれたら、その身代りを、きつと殺すぞ。ちよつとおくれて来るがいい。おまえの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ」
「なに、何をおっしゃる」

「はは。いのちが大事だったら、おくれて来い。おまえの心は、わかつているぞ」

メロスは口惜しく、地団駄じだんだ踏んだ。ものも言いたくなくなつた。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君デ
イオニスの前で、佳よき友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロ
スは、友に一切の事情を語った。セリヌンティウスは無言で首肯うなずき、
メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかった。セリ
ヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、
満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着
したのは、翌あくる日の午前、陽は既に高く昇って、村人たちは野に出
て仕事をはじめていた。メロスの十六の妹も、きようは兄の代りに
羊群の番をしていた。よろめいて歩いて来る兄の、疲労困憊こんぱいの姿を
見つけて驚いた。そうして、うるさく兄に質問を浴びせた。

「なんでも無い」メロスは無理に笑おうと努めた。「市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよからう」

妹は頬をあからめた。

「うれしいか。綺麗きれいな衣裳も買って来た。さあ、これから行って、村の人たちに知らせて来い。結婚式は、あすだと」

メロスは、また、よろよると歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

眼が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と

頼んだ。夜明けまで議論をつづけて、やっと、どうか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となった。祝宴は、夜に入っ
ていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなつた。メロスは、一生このままここにいたい、と思つた。この佳
い人たちと生涯暮して行きたいと願つたが、いまは、自分のからだ
で、自分のものでは無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身
に鞭打ち、ついに出発を決意した。あすの日没までには、まだ十分
の時間が在る。ちよつと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と
考えた。

メロスは宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。

眼が覚めたのは翌る日の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、南無三、寝過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。きようは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑って磔の台に上ってやる。メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出た。

村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止^やみ、日は高く昇って、そろそろ暑くなってきた。

全里程の半ばに到達した頃、降って湧^わいた災難、メロスの足は、

はたと、とまった。見よ、前方の川を。きのうの豪雨で山の水源地
は氾濫はんらんし、はどうどうと響きをあげる激流が、木葉微塵こつぱみじんに橋桁はしげたを跳
ね飛ばしていた。彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまわ
し、また、声を限りに呼びたててみたが、繫けいしゅう舟は残らず浪に浚さらわ
れて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上り、
海のようになっている。今はメロスも覚悟した。泳ぎ切るより他に
無い。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにの
た打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の闘争を開始した。めくらめつぽ
う獅子奮迅の人の子の姿には、神も哀れと思つたか、ついに憐愍れんびんを
垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すが
りつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のように大き

な胴震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といえども、むだには出来ない。陽は既に西に傾きかけている。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切って、一気に峠を駆け降りたが、さすが流石に疲労し、折から午後の灼熱しやくねつの太陽がまともに、かっと照つて来て、メロスは幾度となく眩暈めまいを感じ、これではならぬ、と氣を取り直しては、よろよろ二、三步あるいて、ついに、がくりと膝を折った。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。身体疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいふてくさいという、勇者に不似合いな不貞腐れた根性が、心の隅に巢喰った。

ああ、もういつそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すよう

な事はしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬる哉かな。――四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

ふと耳に、潺せんせん々、水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を吞んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、見ると、岩の裂目から滾こんこん々と、何か小さくささや囁ささやきながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスメロスは身をかがめた。水を両手で掬すくって、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。

肉体の疲労恢復かいふくと共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。走れ！　メロス。

私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立って走れるようになったではないか。ありがたい！　私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、陽が沈む。ずんずん沈む。待ってくれ、ゼウスよ。

私は生れた時から正直な男であった。正直な男のままにして死なせて下さい。

路行く人を押しつけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のように走つた。風態なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸体であった。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っている。最後の死力を尽して、メロスは走った。メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走った。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合った。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って来た」と大声で刑場の群衆にむかつて叫んだつもりであつたが、喉のどがつぶれて、嗄しわがれた声が幽かすかに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆を掻きわけ、掻きわけ、

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいます！」と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられてゆく友の両足に、齧かじりついた。群衆は、どよめいた。あっぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌ

ンテイウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンテイウス」メロスは眼に涙を浮べて言った。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ」

セリヌンテイウスは、すべてを察した様子で首肯うなずき、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しく微笑ほほえみ、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生れて、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない」

メロスは腕に唸うなりをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「ありがとう、友よ」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。

群衆の中からも、歔歔きよきの声が聞えた。暴君ディオニスディオニスは、群衆の背後から二人の様を、まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、こう言った。

「おまえらの望みは叶かなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい」

どっと群衆の間に、歓声が上がった。

「万歳、王様万歳」

ひとりの少女が、緋ひのマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教えてやった。

「メロス、君は、まっぱだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ」

勇者は、ひどく赤面した。